

## 書評

## 荻部直『丸山眞男——リベラリストの肖像』考

笹倉秀夫

## はじめに

本稿は、荻部直著『丸山眞男——リベラリストの肖像』（岩波新書、2006年。以下、「荻部本」と呼ぶ）を後述の視角から検討することを、課題にする。筆者は、①荻部本は丸山眞男の思想の根幹を押さえようとする書であるから、この本の検討は丸山の思想の主要論点（複数）を再確認する上でも意味があるだろうと考え、また、②〈著述活動においては自戒していないとこのような問題が発生するのだ〉との教訓を広く共有することに意義があると考え、さらに、③かかる問題点に気付かず上滑りしている日本の読書界・出版界・学問界を省みることも重要だと考え、10余年を経ても未解決なので、本稿をここに発表する。

議論の前提として、まず荻部本がもつ次の特徴を押さえておこう。すなわち荻部本には、自著がそれまでの丸山眞男論とは一線を画す独自のものと強調する記述が異様に多い。荻部本のこの特徴は、本稿の議論との関連において重要な意味をもつ：

（1）荻部本11頁は荻部本の特徴として、「丸山の思想と人物について考えるとき、丸山にまつわる「イメージの層」をとりよけ、出来あいのさまざまな「丸山論」の定型を回避しながら、その内実に向かい迫ろうとした点を挙げている。人は、これをどう読むか。〈荻部本は、出来あいのさまざまな「丸山論」の定型を回避しつつ独自に「内実に向かい迫ろうとしている；それゆえ荻部本にはユニークな丸山像が満ちあふれているのだ〉と人は、読むだろう。

（2）荻部本225頁には、「これまで論じられてきたあれこれにふれていないという玄人筋の声に対しては、なりゆくいきおいでこうなった、とだけ答えておこう」とある。旧世代の丸山論者による紋切り型の議論には自分はつきあわない；そのことで「丸山論の蓄積を踏まえていない」等と言われても、「なりゆく

いきおいでこうなった」(＝これが自分の独自考察の成果だ)と答えるほかない、と言うのだ。ここを読めば人は、「この本は、これまでの陳腐な丸山論を一掃してくれた本だ」と思うことだろう。

(3) 苅部本225頁は、この書を出版する目的が「丸山眞男という希有な知性がのこしたことばの群れの中へわけいって、そのなかをさまよう途上で見つけた、珠玉や棒きれや落とし穴を、できるかぎり克明に記し、それぞれと出あった驚きを、読んでくれる方々とともにすること」にあるとする。

①「さまよう」とは、道案内なく暗中模索することである。すると人はここを読んで、〈苅部本が出している重要論点は、著者が前人未踏の地をゆく探求で得たものだ〉と思うだろう。苅部本が先行研究を明示していない諸論点については、とりわけそうだろう。②「さまよう途上で見つけた」の「見つけた」は、〈自分単独で新しい発見をした〉の意だと、人は読むだろう。③「出あった驚き」を人は、思いがけず出あったときにもつものだ。先行研究を参照してそこで学んだことを再確認するかたちで丸山を読むのでは、「出あった驚き」はけっして出てこない。それゆえ、「出あった驚き」に関わる箇所に行き研究が明示されていなければ、〈苅部はここでは、独自の探索で偶然に新しい丸山を発見し驚いているのだ〉と、人は解するだろう。

このように独自探求を強調する苅部本である。ところが実は、この本の主軸を成している論述(複数)は、特定の先行研究が明らかにしていたことからと、通常考えられないほどに重なっている。その際、苅部本はその重なり的事实、当該先行研究を示していない。

以下では、それらの重なりについて考察していく。ここでは紙幅の関係上、考察対象を笹倉秀夫『丸山眞男論ノート』(みすず書房、1988年)、およびその増補改訂版である『丸山眞男の思想世界』(みすず書房、2003年)との9つの重なりに限定し、順不同で論じる(以下、『丸山眞男の思想世界』を「笹倉本」と呼びここから引用するが、引用箇所は『丸山眞男論ノート』にも対応するものがある)。

予め断っておくが、以下には笹倉本からの多くの引用が出てくるのだが、それらは笹倉の先行性を誇るためのものではない。また、苅部本はその215頁から222頁にわたって多くの「参考文献」を挙げているところ、以下に見るほどに重なりが多い笹倉本は、そこにすら挙げていないのだが、本稿はそのことへの不満などといったことによるものではない；苅部本・笹倉本間のアイデアの不可思議な重なりを、事実として記述するにすぎない。

なお、苅部が笹倉の上記2著を苅部本執筆前に読んでいたことは、苅部本人に

確認済みである。

## 1 丸山の思想に内在する「あい矛盾する二つの要求」をめぐって

苅部本は、「序説 思想の運命」の中で、丸山の基軸的思考として、「内部にある葛藤」・「亀裂と葛藤」による思考と「問題発見型の思考」とを挙げる。このうち前者、「内部にある葛藤」の思考については、たとえば次のように述べている：

苅部本11頁：「丸山の言葉がはらむ熱気は、おそらく、自分自身の内部にある葛藤を見つめるところから発している。たとえば、政治参加と隠遁といったように、あい矛盾する二つの要求が、両方とも自分の中に並びたっていることを、丸山は深く気づいていた。そこで不決断のままとどまることを潔しとせず、何らかの方向へとみずからをおしだそうとする努力。それが丸山の文章に強い緊張感を与えている。世に流布する丸山のイメージとは、そうして生まれた言説の、いわば突端部分を肥大化させたものであろう。」〔以下、下線および〔 〕はすべて笹倉による。〕

この指摘は、苅部本にとって最も重要なメッセージ提示に属す。苅部本は、「世に流布する丸山のイメージ」は、丸山の内面的葛藤・緊張を認識できていないところにある；丸山が、人生の様々な局面で、他の選択肢の重要性を認めつつも、ある判断からしてあえて、それと異なるものを選んでいるのに、これまでの丸山論は、その選択の結果ばかりを見て、他の（最終的に選ばれなかった）選択肢が丸山においてもつ意味、選択の際の、選択後の丸山の苦悩を見ず、丸山の生き方を一面的に扱ってきた；これでは丸山の独自の内面的ダイナミズムやバランス感覚を理解できない、としその克服を課題とする（11頁）。

実際苅部本では、上記テーマがとりわけ重視されており、「序説」で出された、丸山の「内部にある葛藤」・「強い緊張感」は、苅部本の後の所で、その巻末まで、くり返し扱われている。たとえば181頁：「いやいやながらの政治参加」の重要性の強調、187頁：徳川時代の否定面と肯定面の認識、193頁：武士における忠誠と反逆の同時存在＝「武士たちの自我の内部では、この二つの「忠誠」が相剋をくりかえしている」、196頁：「むしろ内部の分裂こそが、自我に輪郭と活動力を与えていた」、197頁：「「内側」にとどまっていることを自覚しながら、外との「境界」の上に立ちつづける」、199頁：「他者感覚」の重要性の強調、といったかたちにおいてである（187・196頁も参照）。

既成の丸山論に対する苅部本の上のような批判を読み、また上で引用した箇所にあった「丸山の言葉がはらむ熱気は、おそらく、自分自身の内部にある葛藤を見つめるところから発している」の言説に着目した読者は、〈この本はこれによ

って、一面の結果しか見ないこれまでの丸山論を乗り越えた。「おそらく」の語にも、そういう前人未踏の地に行くのだという著者の気持ちが出ている) と考えることだろう。

ところが、荻部本のこの丸山認識は、実は笹倉の 2 著が丸山を考える際にとくに重要としてきたことと大きく重なっている。笹倉の 2 著も、丸山の思考と認識、自我の内部における緊張感の分析をその根幹のメッセージの一つとしている。

すなわち笹倉本は丸山の思考の特徴を、たとえば「相対立する両極の間でその両極を絶えず直視しつつ思考し行動する」(397頁)、「相矛盾するこれら二つの方向の同時追求」(422頁)、さらにはまた、「相矛盾する二者の間で実存的に悩む」(276頁) ところであると捉えている。笹倉本はこれを第 3 部および第 2 部第 3 章で主題にしており、また第 1 部も基軸の一つにしている(笹倉本の「事項索引」中の「アンチノミーの自覚」、「内面的緊張」、「内的矛盾の弁証法」、「矛盾」など参照)。

重なり事例の一つを論じておこう。荻部本の 181 頁は、「丸山の「内部にある葛藤」」の例として、「いやいやながらの政治参加」という、他の選択肢を尊重しつつも敢えて別様に態度決定する丸山の姿勢を描く。荻部本 11 頁には、「政治参加と隠遁といったように、あい矛盾する二つの要求が、両方とも自分の中に並びたっていることを、丸山は深く気づいていた。」とあった。だが、この事例は、笹倉本の 282 頁に出てくる。笹倉本はその所で、「政治参加と隠遁」のあい矛盾する二つの要求が丸山の中で相克していること、「参加」を選びつつも「隠遁」にあこがれる態度、を同様に問題提起している。笹倉本はそれらを、丸山の人生の様々な局面での、「相対立する両極の間でその両極を絶えず直視しつつ思考し行動する」こと等の一環だと次のように位置づけている：

笹倉本 282 頁：「すなわち、丸山は、一方では、本第二部で見たところからも窺えるように、「戦中と戦後の間」をつうじて時の政治的課題に——主として「防衛」的にかつ言論面中心にはあれ——強くコミットしてきた。たとえば『日本政治思想史研究』(一九五二年)の「あとがき」に見られる、「徳川社会における近代の要素の成熟に着目すること」が「ファシズム的歴史学に対する強い抵抗感を意識した人々にとっていわば必死の拠点」であり、「魂の救い」であったという言明は、政治への(学問をつうじた)深いコミットメントを物語っている。丸山の実践性は、戦後初期およびとくに「安保」期等における、自由と民主主義に対するかれの献身ぶりが何よりも雄弁に語っている。一方での政治へのこうした「まじめ」な姿勢とならんで、しかし他方でかれは、政治的世界が本来の自分の「場」ではないという、いわば政治を「戯れ」と見る立場を吐露してもいる。たとえば、「[自分は]元来

隠遁型なんです。叱られるかもしれないけれど、やっぱりね、天下国家論よりは音楽なんか聞いているほうが、楽しいね。下手なピアノを弾いているほうが楽しいんだなあ」（前掲対談「語りつぐ戦後史（五）」一〇八—一〇九頁）、と言う。

「政治参加と隠遁」の、自我の内部での相克の、同じ指摘である。しかるに苅部本は、上記のようにその11頁で、先行する丸山論を批判して、それらは丸山の内面の葛藤を理解しない表面的理解に立つとする。だとしたら笹倉本の上記議論は、どう位置づけられるのだろうか。

笹倉の2著において、①「丸山の「内部にある葛藤」への着目がポイントの一つであること、そしてそれが、誰でもが論じている・論じること（common knowledge）ではなく、新しい丸山解釈であること、②それこそが苅部本においても基軸的論点（丸山の思想をとらえる上でとくに重要な命題）であること、③この点で苅部本と笹倉本は議論が重なっていること、は第三者が指摘している。

すなわち、丸山眞男研究を進めてきた都築勉は、政治思想学会の年報『政治思想研究』第7号（2007年）所収の「丸山眞男との出会い方」において、苅部本を書評した箇所次のように言う：

都築著「丸山眞男との出会い方」357頁：「加えて注目されるのは、丸山の中に常に事実と価値、現象と理論というような「二元的要素」があり、両者の「緊張」関係が思想形成の機動力になっているという見方である（石田、九八頁。飯田については『丸山眞男集』第一〇巻の「解題」三六五頁〔後に『批判精神の航跡』筑摩書房、一九九七年、に収録〕参照）。これはつとに笹倉秀夫が『丸山眞男論ノート』（みすず書房、一九八八年、後に『丸山眞男の思想世界』みすず書房、二〇〇三年、に増補）で述べたところだが、苅部本はそれを丸山の自我の内部における「葛藤」と捉え、それが彼の文章に「熱気」を与えているという（苅部本、一一頁）。卓抜な指摘だ。」

都築は苅部本について、その柱となっているのは、「〔丸山の〕「二元的要素」論、「両者の「緊張」関係」論だと言う（都築は、苅部本にはもう一つの柱として「評伝という方法」があるとするが、これについては都築はあまり評価していない）。そして、苅部本のそのような心柱である「両者の「緊張」関係」論は笹倉本のそれに重なっている、と都築の書評文は証言しているのである。

都築は前にも、すなわち『政治思想研究』創刊号（2000年5月）掲載の論文「丸山眞男論の現在」においても、笹倉の『丸山眞男論ノート』の基軸は、丸山の「矛盾した側面を同時に見」る姿勢への着目にあり、それが重要かつユニーク

な視点だとしていた：

都築「丸山真男論の現在」27-28頁：「笹倉はまず冒頭において丸山を、「多重性を持った自己の思想と思考方法を抽象的、一般的な形で呈示することをしない人」と規定する。同時に丸山は「時代状況や発言の場・対象に対応して視点や強調点の“使い分け”を行う人であり、「具体的なテーマと状況に即して」思考する人である。〔…〕それは、状況に応じた「価値判断の相対性の主張」ともなり、換言すれば、「ものごとの反対の、あるいは矛盾した側面を同時に見」ながら、「決断としては現在の状況判断の上に立って左か右かどちらかを相対的によしとして選択するという態度」である。笹倉の別の論文での表現を使えば、「相対立する両極の間でその両極を絶えず直視しつつ思考し行動する」姿勢である。こうして笹倉は、丸山の知的な活動を、対象の中の異質な要素の対立を常に際立たせながら、両者の「緊張関係」でもって現実をとらえて行く営みとして位置付けるのである。それはまさに「複合的な思考」である。〔…〕

笹倉はその著書を以上に述べた丸山の思考方法の特質に沿って構成している。まず丸山の関心の中の最大の両極的要素を「個人と社会」に設定した上で、第一章で「個人と社会の同一」、第二章で「個人の内的自立」という相反したベクトルを扱う。そして第三章では丸山における両者の「アンチノミーの自覚」が指摘され、それらを不断の運動として統一する観点として、「弁証法」や「バランス感覚」の存在が注目されている。それは、丸山における民主主義原理と自由主義原理との動的な統合の問題でもあった。笹倉は、前述した間宮陽介の議論の仕方とは反対の道順をたどって、すべてを根本問題に還元するのではなく、「個人と社会」というような関心の源流から出発して、丸山が生涯において取り組んだ多くの個別的な問題に踏み入る形で、その思考方法のダイナミクスを明らかにしようとする。すなわち、丸山における「個人と社会の関係づけ、個人と組織、道徳と権力、理論と実践、パトスとロゴス、心情倫理と責任倫理、宗教改革の精神と啓蒙主義の精神、ノミナリズム的・機能論的思考と原理論的・実体論的思考、イギリス精神とドイツ精神、等々」の二項関係の具体的な処理の仕方を問題とするのである。」

（笹倉本が丸山の「内部にある葛藤」を新たに問題提起とした意義については、都築勉の前に富田宏治が、『丸山真男——近代主義』の射程』（関西学院大学出版会、2001年、5頁以下）で「アンチノミーの自覚」と題した章を立てて論じている。遠藤興一「丸山真男における宗教的実存のゆくえ（1）」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』47号、2015年）をも参照。）

荊部は政治思想学会に属しており、それゆえ荊部がこの学会誌（後者は創刊号である）を入手し読んでいたことは、容易に推測される。しかも荊部は、前述のごとく笹倉本を読んでいて、人は、自分が強調しようとすることをすでに強調し主題にもしている先行研究を知っていた場合には、それに言及せず逆に「自分が

独自に初めて発見した」と読者に印象づける言明は、普通はしないだろう。

笹倉の『丸山真男論ノート』の出版は、1988年であるから、その後の20年間に、丸山論で「丸山の「内部にある葛藤」を扱うものが上述の他にも散見するのは事実である（たとえば『思想』883号（1998年）所収の石田雄論文・斎藤純一論文、上記の飯田論文など）。しかし、これらでの「丸山の「内部にある葛藤」への論及は主軸たる位置にはない。丸山における、「葛藤」の重要性、それが丸山の思考を規定する力の強さは、まだ common knowlegde にはなっていないのだ。この事実、上にあったように苅部本自身が強調しているところである。

## 2 精神の「型」が重要であるとの丸山の指摘に関する議論をめぐって

苅部本はその186頁以下で、丸山が1960年代に大衆社会化現象に直面して、精神の「型」（それぞれの道で、定まった立居振舞、規則を稽古を通じて身につけその道の原理を深く自分のものとする）を確立することが政治的自立にとっても必要だと強調し始めた、と論じている。苅部本は言う：丸山はこの観点から、明治人の思想的強さの基盤を「型」に求め、「型」の喪失がその後の（大正期以降の）日本思想に空洞をもたらしたと見た；丸山が江戸時代の文化を再評価するようになったのも、そこに「型」の定着を見出したからだった、と。このテーマは、後述する「生と形式」のテーマと相まって、苅部本では一つの基軸を成す。

苅部本187頁：「かつて丸山の助手論文や、福澤論吉研究では、徳川時代の社会は、身分制支配が貫徹し、「権力の偏重」が浸透する秩序として、その否定面に重きをおいて描かれていた。ところが六〇年代後半の丸山は、むしろ「型を磨き洗練することで、全体の文化体系をあれほどに完成した社会というのは、江戸時代以外にはないと高い評価を見せる。古代からの日本の歴史においては、「形式なんかどうでもいいというエネルギー主義」と、「大陸文化をもらって適当に手直しする修正主義」とが「支配的潮流」であったが、徳川時代は「鎖国」が続いたために、文化の内容に大きな変動がなく「千篇一律」になり、その内部での形式の洗練へとエネルギーが向けられたのである [座7-120-121]」。

苅部本199・200頁：「戦後の「型なし社会」の到来にであって、新たに「伝統」を汲みなおし、現代日本人の身にあった「型」としてして血肉化させることの必要性を、改めて痛切に感じたのである。」

「近代主義者」とされて来た丸山が——意外にも——古来の「型」を重視し、それゆえこれを生み出した江戸期の文化・生活の伝統、とくに「武士道」由来

のモラル」(187頁)を評価している、という重要な指摘である。

ところがこの議論は、笹倉本が強調したことと大きく重なっている。すなわち、以下のように笹倉本も、丸山が意外にも「型」を重視し江戸時代を評価したこと、「型」の再評価は1960年代以降であり、丸山が大衆社会化現象に直面してそれに精神面で抵抗する足場として「型」の確立を考えたことと不可分であること、丸山はその観点から、明治人の思想的強さをかれらが江戸時代の伝統、とくに武士道精神を継承しつつ生きたことによって身に付けた「型」に求め、大正期以降におけるその喪失が思想上の深刻な虚弱化をもたらしたと見たこと、丸山はこの観点から江戸時代の文化的伝統を評価したこと等を論じている。荻部本・笹倉本間で解釈上の立脚点が異なるわけでもない。それどころか、荻部本が根拠として丸山から引用している箇所はかなりの部分が笹倉本が引用している箇所と同じである：

笹倉本354頁：「「型」と江戸時代のこのような関係を見るならば歴史への視座も変わる、として丸山は言う、「戦争中、『日本政治思想史研究』を書いた時代とはね、ちょうど一八〇度変わった視点から江戸時代を見直してるんです」、と。先にも見たように、丸山は、『日本の思想』の中で「思想が対決と蓄積の上に歴史的に構造化されない」という、思想の雑居性・無構造性を問題にしたのであるが、しかし、一九六七年のこの対談「語りつぐ戦後史(五)」(一一七頁以下)においては、この点でも江戸時代が「例外」であったということを指摘している。すなわち、歴史的に見て「日本で支配的な潮流」は、——『日本の思想』が明らかにしているように——「形式なんかどうでもいいというエネルギー主義と、それから大陸文化をもらって適当に手直しする修正主義」であり、このけっか、思想が異質のものとの厳しい対決、「内面的緊張」を欠落させていくことになる。[…]しかし江戸時代の「型」の洗練は、これとは別の方向性をもつものであった。」(対談「語りつぐ戦後史(五)」のページまで、荻部本と同じなのである。)

笹倉本352-353：「明治の後期以降「とうとうと進行」した「大衆社会化」によって、「型、形式がひたすら崩れてゆき、「戦後はただその傾向が加速されただけ」である。大衆社会というのは、「一口にいえば、型なし社会」なのである。[…]「ただ型や形式をぶちこわす」だけでは、流行やマス・コミに流されてしまう。新しい社会主体の形成のためには、それゆえ、「型へのシツケっていう意味、これが人生にとって、どんな意味があるかを考え直す必要があるんじゃないか。芸術でも、学問でも」……と。つまり、「生活の型」は、ここでも状況、とくに今日の「日本の文脈」との関連で提起されており(これも視座の「使い分け」の問題である)、そのけっかここでは、一方



で、新しい思想・原理を全人格的に定着させるという近代化上の意義とともに、他方で、大衆社会状況下で失われていく人間の自立性・主体性を回復するためという現代的な意義をも、もたされている。」

笹倉本はさらに、この問題との関係で、ジンメルの「生と形式」の問題提起を丸山が深く受け止めた事実をも指摘している。しかも、「生と形式」に関わる丸山の見解の考察は、笹倉本第1部の主題そのものである。そこにはたとえば、上述の文献を使って次のように論じた箇所がある。

A：笹倉本22-23頁：「丸山において〈生と形式〉という問題枠組は、後述のように（六二頁以下参照）、すでに学生時代の論文「政治学に於ける国家の概念」（一九三六年、『戦中と戦後の間』、みすず書房、一九七六年、『丸山眞男集』岩波書店、第一巻）において、「ジンメルはかかる現象を生命の形式に対する反逆という公式で説明している」という形で、ジンメルに結びつけて、本第一部の主題に深く関連しながら使われている。また、一九四九年の論文「肉体文学から肉体政治まで」では、ジンメルの『近代文化の軋轢』を引証しながら、〈生と形式〉のテーマが、「現代は「生」が古い形式に甘んじなくなっただけでなく、凡そ形式一般に反逆して自己を直接無媒介に表出しようという時代」であるという形で、展開されている（『現代政治の思想と行動』三九一頁、『丸山眞男集』第四巻）。

しかるに、このジンメルへの関係付けに関しても苅部本は、同じことを論じているだけでなく、その際の引用箇所すら同じである（論文「政治学に於ける国家の概念」および、「肉体文学から肉体政治まで」）；

B：苅部本186頁：「形式の喪失」という指摘は、丸山が学生時代から愛読し、緑会の懸賞論文〔「政治学に於ける国家の概念」〕でも注に引いた、ゲオルク・ジンメルの講演『現代文化の軋轢』（一九一八年）に由来するものである。論文「肉体文学から肉体政治まで」（一九四九年）で、丸山はその内容をこう紹介している。「歴史の過渡期にはいつも生が自己を盛り切れなくなった形式を捨ててより適合した形式をつくり出すのだが、現代は「生」が古い形式に甘んじなくなっただけでなく、凡そ形式一般に反逆して自己を直接無媒介に表出しようとする時代で、そこに最も深刻な現代の危機がある」[集4-223~224]。

上のA：笹倉本とB：苅部本との引用箇所では、文章そのものまでが両者で相互に近似している。すなわち、まず丸山の学生論文「政治学に於ける国家の概念」が出て来る。そしてその関連でジンメルの『近代文化の軋轢』が扱われ、次に丸山の論文「肉体文学から肉体政治まで」が扱われる、その際の複数の引用は、それぞれまったく同じ箇所からのものである。

加えて、「型」のテーマをめぐる議論のかたちも同じである。ここまでの議論をまとめると、両者では、丸山が「型」を再評価したことを、①丸山が大衆社会問題に直面してのことであり、②「型」をめぐるは明治の思想と大正期の思想との対比が重要であること、③丸山の、江戸時代の「文化・生活の伝統」の評価につながること、④ジンメルの「生と形式」の問題と結びつくこと、に至るまで重なっているのだ。

上述のように「型」の問題は、笹倉本がきわめて重視したことがらである（笹倉本「事項索引」の「型」の箇所参照）。それは笹倉本第1部の主題であるし、第2部第4章の重点テーマの一つである。それは、「近代主義者＝丸山」のステレオタイプを破るパワーをもつことがらだからである（笹倉は、高校時代に唐木順三『現代史への試み』（筑摩書房、1963年）に震撼し、以後「型」の問題を研究の軸としてきた）。

『丸山真男論ノート』の1988年より前には、丸山をめぐるこういう議論はなかった。1988年以降は、別の論者が（丸山における「型」の重要性）を論じだしてはいた。たとえば『図書』1996年10月号の宮村治雄のエッセイ「ある情景」がそうである。丸山が「型」を評価しているという事実には、研究者なら丸山の作品を広く読めば上記対談「語りつぐ戦後史（五）」（1967年）に出くわしたりして、気付くこともあるだろう。しかし「型」の問題を、論文「忠誠と反逆」ないし「自由民権運動史」のモチーフ（武士道の評価）と関連させたり、それらを「生と形式」をめぐるジンメルの思想と結びつけて深めたりすることは、広く丸山を読めば自ずと至れるというものではない。このことは、宮村の上記エッセイにそうした視点が欠落している事実からも分かる。「簡単に出てくる」と言う人がいるならば、それは「コロンブスの卵」のケースと同様、実は先行研究の知をすでに踏まえているからである。

「簡単に出てくる」ものでないこと、「型」をめぐる上記連関が common knowledge ではないことは、宮村治雄が上記エッセイ「ある情景」で——笹倉本後にも——わざわざ「型」を重視して主題の一つにしている事実から分かる。このことは、また、荻部本自体が語ってもいる。すなわち荻部本はその187頁で、「「武士道」由来のモラルも、そうした「型」の一環と〔丸山は〕考えていたのだらう」と述べている。公知・自明のことがらなら、「だらう」との推論形式は使わなかったはずである。武士道が「型」の一つに関わる事実——これは笹倉本が355頁や363頁以下で述べている——を論じるには、丸山の論文「忠誠と反逆」等を丸山が「型」について論じた他の作品と連関づける解釈作業を要するのだ。

### 3 〈超越的なものへ帰依することが自由な精神の軸となる〉をめぐる

丸山のリベラリズムの根底には複数の原理が働いている。すなわち、a. 超越的なものへ帰依することによって今の政治的環境から自立するという原理（親鸞やキリスト教と結び付く）と、b. プラグマティズムによって思考の軽やかさを確保するという論理（福沢諭吉や長谷川如是閑、ラスキラと結び付く）、また、後述する（本稿「4」参照）c. ニヒリズムによる裸一貫の自立、そしてd. 中世的自由評価の論理などである。この「3」で問題になるのは、上記aの論点である。

苅部本はその73頁以下において、このaの論点を扱っている。そこには丸山をめぐって、「決して失ってはならない原理。そうした理念への帰依こそが、個人が「歴史的現実」に対して、一人で抗してゆく強靱さをもたらすのである」（76頁）とある。超越的なものへ帰依することが精神の真の自立・自由をもたらす、と丸山が考えていたという指摘である。苅部本は、103頁以下や161頁以下でも、個人の精神的独立のためには「見えざる権威」へ帰依することが必要である、とする。また、丸山がそうした思想をもつにいたったのは、師であった南原繁や田中耕太郎らが戦時中に、そのキリスト教信仰、超越神への帰依によって立って権力に抵抗した事実を丸山が目当たりにしたからだと論じる。かつて自由主義をマルクス主義的に批判していた丸山が、この体験を経て立場を換え、自由主義を再評価するようになったのだ、と苅部本は論じている。

そして苅部本は、これらの記述の典拠として、①対談「語りつぐ戦後史（五）普遍的原理の立場」、②座談「丸山眞男氏をかこんで」、③対談「歴史意識と文化のパターン」、④「思想史の方法を模索して」を引証している。

このテーマは、苅部本にとって重要な意味をもつ。このテーマを扱うことによって初めて苅部本は、政治思想に関わる根源的問題提起をした本、苅部本の題名にある「リベラリスト」の心髄を突いた本となっている、と言えるからである。実際苅部本は、このテーマを後述するように多くの箇所論じている。

ところが、苅部本のこのテーマに関する記述は、笹倉の2著の記述と内容だけでなく論述形式も重なっている。両著で、同じことが同じ論調・解釈のスタンスで、かつ上記四つの同じ文献の同じ箇所引用でもって論じられているのだ。

すなわち、笹倉本第2部第2章（とくに170頁以下）の全体は、「国家を超えた理念に依拠して、戦時においても国家に対し精神的自立を保持しつづけ」（175頁）ことが丸山にとって重要であったという認識を中心テーマにしている。苅部本と同様、笹倉の2著もまた、(a)丸山が「転向の時代」に南原繁等の抵抗

を体験したことで、〈理念・超越的なものへの帰依による自由〉の思想にいたったこと、(b) 〈理念・超越的なものへの帰依〉が精神の独立を支えるとする丸山の議論から窺われる、丸山のリベラリズムの心髄、(c) この点での丸山のプロテスタンティズム評価の重要性、などを扱っている。加えて、その際に笹倉本が使ったのも苺部本と同様、①対談「語りつぐ戦後史(五) 普遍的原理の立場」、②座談「丸山眞男氏をかこんで」、③対談「歴史意識と文化のパターン」、④「思想史の方法を模索して」(『丸山眞男集』第10巻) などである。

さらに、笹倉本はこの文脈で、オットー・ヴェルスの1933年の国会演説を取り上げている。〈周りはずべてナチス〉という絶体絶命的の孤立の中で、ヴェルスは、マルクス主義者でありながら、理念としての「見えざる権威」に訴えて抵抗した；この抵抗のあり方は、自分自身が軍国主義下にあった丸山に、政治的な生き方を方向付けることとなった重要な演説であった、と。ところが、まさにこの文脈においてのヴェルス演説の扱い態様もまた、苺部本と笹倉本では重なっている。

苺部本は以上の事項に関連して、松沢弘陽の論考「丸山眞男における近・現代批判と伝統の問題」(大隅和雄・平石直昭編著『思想家 丸山眞男論』ペリカン社、2002年)を引証している。そこで、以下では、苺部本と松沢論文、そして笹倉本の該当箇所を比較してみよう。

表1：オットー・ヴェルスの演説の位置をめぐる記述は、下記のように重なっている。  
(笹倉『丸山眞男の思想世界』の引用箇所は、同『丸山眞男論ノート』(1988年)の中にもある。)

苺部『丸山眞男』(2006年)	松沢論文(2002年)	笹倉(1988年・2003年)
主題の共通性：マルクス主義者ヴェルスは、絶体絶命の場で、理念への帰依によってナチスに抵抗した。		
苺部75-76頁：「もともとヴェルスその人は <u>マルクス主義者</u> で、近代思想が説いた自由や平等の理念は「ブルジョワ的な歴史的制約」のもとにあるという立場のはずである。しかし、 <u>国家権力が極大化し、抵抗者が暴力によって抹殺されてゆく危機にあって、あえてその理念が「永遠にして不壊」であることを強調し、それに対する帰依を宣言しながら、世の大勢に抗した</u>	松沢285頁：「しかしそれを先立つ三月二十三日、 <u>授権法を可決したドイツ国会において、満場の怒号の中に立った</u> 社会民主党のオットー・ヴェルスが、 <u>マルクス主義者</u> でありながら、「 <u>永遠にして不壊なる理念</u> 」への信仰を告白し、それに拠って圧倒的な敵に対して抗したという事実を、丸山は大学に進んだ後知った。マルクス主義の影響をくぐって思想の存在拘束性・相対性に心	笹倉『丸山眞男の思想世界』176頁：「国会のまわりは突撃隊、内部はほとんどナチス黨員によって固められ、「明日にも強制収容所ゆきになるかもしれない、しかも見える限りの人民はあげてハイル・ヒットラー」(二五頁)という状況下で、ヴェルスは、「 <u>自由と平和と正義の理念への帰依</u> 」に立脚して最後の抵抗をおこなった」。 176頁：「自由・平等の理

<p>のである。〔丸山は〕この演説を読んでいらい、「歴史をこえた何ものかへの帰依なしに、個人が「周囲」の動向に抗して立ちつづけられるだろうか」という問題が、頭を離れなくなったという〔座7-257〕。この回想の言葉は、<u>丸山自身の信仰告白でもあろう。</u></p>	<p>を向けていた丸山に、マルクス主義者が<u>超越的普遍的理念への信仰によって迫害の中で自己を支えるという出来事は、大きな思想的衝撃を与えた。</u></p>	<p>念の永遠性」を「ブルジョア的幻想」としてその歴史的被制約性・イデオロギー性を暴露した<u>マルクス主義に立つ人物</u>が、この「<u>絶体絶命の場</u>」で理念へのコミットメントを「うめくように洩らした」のである。丸山はどのように語りながら、ここでもこうした人物像と、自分自身が置かれていた「雪崩をうったような転向時代」の実感とを重ねあわせ、「そういうなかです」とぼくの頭からはなれなかった問題は、<u>歴史をこえた何ものかへの帰依なしに、個人が「周囲」の動向に抗して立ちつづけられるだろうか、ということ</u>です」（二六頁）と結んでいる。</p>
--	--	--

表2：基底となる丸山の根本思想、〈理念・超越的なものへの帰依による自由〉をめぐる議論も、3人で次のとおり重なっている。

<p>荻部『丸山眞男』（2006年）</p>	<p>松沢論文（2002年）</p>	<p>笹倉（1988年・2003年）</p>
<p>主題の共通性：理念・超越的なものへの帰依が政治的現実からの独立を可能にする。</p>		
<p>荻部76頁：「決して失ってはならない原理。そうした理念への帰依こそが、<u>個人が「歴史的現実」に対して、一人で抗してゆく強靱さをもたらすのである。</u>〔集10-320～323〕</p> <p>161頁にも、個人の精神的独立のためには「見えざる権威」に帰依することが必要である；「滔々たる「政治化」の波の中で、「人格的内面性」を徹底して守りうるのは、宗教の立場、とりわけ「ラジカ</p>	<p>松沢288頁：「ここにいう「権威」「価値」は、あらゆる経験的存在を超え、その命令の力も、国家や支配者を含めあらゆる存在のそれに優越するものであった。それは、<u>一個の人格としての丸山の内面——理性と良心——に直接訴えた。存在による拘束ではなく、この見えざる「権威」「価値」による——後年の丸山の概念化を用いれば——「被縛感」が、丸山をつき動かし一切の目に見える事実——権力であれ、多数者であれ——に</u></p>	<p>笹倉・同上170-171頁：「大切なのは、この「原理」が国家——のみならずすべての政治・社会集団——や歴史を超えた（という意味での）<u>普遍的価値を核心とし、それゆえ各個人の内面に直接結びつくものであることである。そうでなければ個人は国家や状況に吸収されてしまう。</u>」</p> <p>175頁：「こうした独立した精神の持ち主はまた、丸山のすぐ近くにもいた。それが、前述のように、理想主義の立</p>

ルなプロテスタント、例えば無教会主義者であろう」と、丸山の「人間と政治」は説いている。」とある。

対して、自由な主体として堅く立つように促すのであった。」

場から、国家を超えた理念に依拠して、戦時においても国家に対し精神的自立を保持しつづけた一人である南原繁である。」

主題の共通性：丸山は戦前に、南原等自由主義者の抵抗を目撃し、理念価値の重要性を意識した。

荻部103-104頁：「もともと「ムード的左翼」で、自由や平等の理念など、没落期にあるブルジョワ階級がみずからとするイデオロギーであるとして、見くだす気分でいた丸山は、ここに来て、「近代」における「自由」と「通義」(権利)の価値を強く認め、その内面化を説くようになった。周囲の学者では、河合栄治郎や南原繁、また田中耕太郎が、時流に抗し毅然と立つ姿に、身近にふれたことも、そうした思想の転向をあと押ししたことだろう。」

松沢284頁：「丸山が、自己を含めた同時代の歴史理解に対する深刻な衝撃をうけ反省を迫られたのは、一九三〇年から四〇年代初めにおたる、洋の東西——日本とドイツに通じる——の知識人のなだれをうつ転向と、それに抗して屹立する少数者の抵抗とに直面する中においてだった。そして丸山は目の当りにし耳にする出来事——知識人の実践——からその思想的学問的意味を引き出し、同時代の学問的・思想的動向をその実践的、帰結と関連づけてとらえた。」

笹倉87頁：「丸山の別の証言によれば、かれが当初こうした「社会的意識」ないし「政治的＝集团的価値の独自性」から出発したのは、「ムード的左翼」の立場にあったからであった。かれは、この立場から、個人や理念を社会的・歴史的にとらえない自由主義などを「甘ちよろいなあ」と思っていた。しかしかれは、やがて到来した「雪崩をうった転向の時代に、かえって、ブルジョア民主主義とか自由主義とかいうものを、見直した、というか再認識した。」(前掲〔①〕「語りつぐ戦後史(五) 普遍的原理の立場」一一頁。『丸山眞男座談』第7巻)。というのも、それはかれが、自分の「内的確信をあの時代にアカデミーの世界で貫きとおしたのは」、カント主義者やカトリック自然法論者といった、「非歴史的」、もしくは「超歴史的」な内的自立の立場に立つ人々であった、という事実を体験したからである(前掲〔④〕「思想史の方法を模索して」二五—二六頁。『丸山眞男集』第一〇巻)。

73頁：「かつては左翼の敵と見なされた自由主義の知識人が、政府や国粋主義者からの抑圧に対し、きびしく節を守って抵抗するようすを目にするのである。」(ここでは、① 対談「語りつぐ戦後史(五) 普遍的原理の立場」が使われている。)

287頁：「学問的立場の変化を、丸山がここで「知的転向」としてとりあげる顕著な例から、穏やかな形のそれまで広げれば、丸山が学生として、後には同僚・同学として接するにいたった、すぐれた政治学者や法学者がそこに含まれる。彼らに共通するのは、大正デモクラシー期における社会科学の新しい展開を支えた広義の歴史主義と実証主義であった。これに対し、彼らが形づくる「大勢」に抗する少数派として「カント主義者とか、カトリック自然法論者」——南原繁と田中耕太郎が念頭にすることは、疑う

175-176頁：「南原先生を師として」(『国家学会雑誌』第

<p>余地がないだろう——をはじめ、キリスト教を信じたマルクス主義を奉じる学者がいた。しかし、その態度決定と学問方法の両面を通じて、丸山に決定的な影響を与えたのはやはり、師南原繁であった。」</p>	<p>八八巻七・八号、一九七五年）において丸山は、一九三九年という時代にも南原が、「われわれは民族と国家それ自体の絶対的存在ではなく、国家の価値を、正義を主張しなければならない」という立場から（真・善・美・正義といった）理念的価値の超越性、それを担う個々人の自由と学問的自律性を説いたこと、これが『原理日本』からの攻撃材料になったことを述べている（四〇七—四〇八頁）。」</p>
---	---

表3：3人の文ではともに、丸山の作品が共通して引用されている。3人の文の次の頁においてである。

引用されている文献名	荻部本の当該頁	松沢論文の当該頁	笹倉本の当該頁
①対談「語りつぐ戦後史（五） 普遍的原理の立場」	73頁	引用なし	87頁
②座談「丸山眞男氏をかこんで」	75頁	285・287・289頁	171頁
③対談「歴史意識と文化のパターン」	75頁	285頁	176頁
④「思想史の方法を模索して」	76頁	286・287・289・290頁	86・87頁

上の表1・2・3を見ると、荻部本と笹倉本とでは、扱われている事実、その解釈を通じて描いた丸山のリベラリズムの構造解析（超越的なものによって立つ自由）がまったく同じであるだけでなく、文の流れ方も、さらには、典拠にした四つの引用文献もが同じなのである。

丸山が超越的なものへの帰依によって自由を得る道を強調していること、ヴェルスの演説、それに対する丸山の意味付与などの事実は、それが出てくる座談会等での丸山発言に出くわせば、認識できることだろう。しかし、それを（丸山のその場での思いつきの発言であるのではなく、丸山のリベラリズムの根幹に関わることがらではないか；自由な精神を支える理念的なもの、への丸山の「信仰告白」につながるものではないか）と察知し、その観点から——数多い——丸山の作品の中から四つの関連作品を選び出して、かつヴェルスの演説の事実ともそれ

らを開連づけて意味付与し、これら全体から、丸山の〈理念・超越的なるものへの帰依による自由〉の思想を構成するとともに、この点がプロテスタンティズムや親鸞の思想を評価する丸山と不可分につながっているとも理解するのは、誰でもがごく自然に至るものではないだろう。それは、当該丸山研究者の根源的な問題意識を反映した解釈行為である。とすれば、丸山の膨大な作品群からのピックアップと解釈とが四つとも重なるのも、不思議である。誰でもがそこに至りうると見えるなら、それはここでも「コロブスの卵」の関係が働いているからだ。

ところで、上述のように苅部本は、松沢論文を挙げている（ここでは「女人筋」すなわち先行研究に依拠したことを認めているのだ）。では、それを挙げておれば笹倉本を挙げる義務はないか。上で見た内容からすると苅部本は、むしろ笹倉本に直接依拠している。苅部は、笹倉の2著を読んでいたのでから、本件での重なりに気付いたはずである。しかも松沢論文には、先行研究としての笹倉本が明示されている（291頁で、ロックが「神への被縛性の意識に強く支えられている」との丸山の言明に関して、それを笹倉本が重視していることを紹介している。これは笹倉本127頁以下に関係する。「神への被縛性」の問題は、本テーマと深く関連する）。苅部はそれを読んで、笹倉本が松沢論文に先行して存在するをも知っていた（研究者は、参照した文献が依拠したその先行文献は気になるものだし、依拠の度合いを気にすべきである）。それなのに苅部は、なぜか松沢論文しか挙げなかった。

なお、本テーマもまた、common knowledge ではない。common knowledge であれば、①笹倉本以前にも議論されていたはずである。②丸山研究の第一人者である松沢弘陽がその論文で重要メッセージとはしなかっただろう。③苅部本の上述の記述、「周囲の学者では、河合栄治郎や南原繁、また田中耕太郎が、時流に抗し毅然と立つ姿に、身近にふれていたことも、そうした思想の転向をあと押ししたことだろう。」（104頁）も、common knowledge でないことを証言している。common knowledge に属すことを論じる際には、人は「だろう」は使わない。④ common knowledge であれば、苅部本はこのテーマを繰り返し扱って強調するようなことはしなかったはずだ（苅部本は「ウェルスの演説」を76頁・99頁・153頁・161頁で繰り返し引きあいに出している）。

#### 4 丸山と「ニヒリズム」の関係をめぐる

苅部本は、その150頁で、丸山の内にある「ニヒリズムの影」を捉えることが丸山理解に欠かせないとする。これは、確かに重要な視点である。丸山のリベラリズムが一見それとは相容れない「絶望感」の洗礼を受けつつ構築されたものでもあることに、眼を向けさせるものだからである。近代主義者、戦後啓蒙として



楽天的思想家と見られてきた丸山をその心奥にまで立ち入って理解すること、丸山  
 の思想構造、精神的自立の独自のありかたの一端の認識は、これによってはじ  
 めて可能になるのだ。

苅部本154頁はこの関連で、現代が「ニヒリズムの苦悩を深く抱えており、み  
 ずからもその時代の子であることを、丸山はすでに自覚していた。」とする。そ  
 して苅部本は、丸山が抱える「ニヒリズムの苦悩」の問題にからんで、「ドスト  
 エフスキー」（と「ニーチェ」と）の思想を丸山が深く受け止め、それによって自  
 分の政治思想を深化させたとし、この「ドストエフスキー」の重要性を丸山に教  
 えた本として、ベルジャーエフの本を扱っている：

苅部本153-154頁：「〔丸山は〕「ドストエフスキーおよびニーチェ以後、古  
 い合理的ヒューマニズムへの復帰はもはや可能ではない。ヒューマニズムは  
 超克されたのである」と説く、ソ連から追放された哲学者、ニコライ・A・  
 ベルジャーエフの『ドストエフスキーの世界観』（一九二一年、香島次郎によ  
 る日本語訳が四一年に出ている）もまた、戦時中に愛読した書物の一つである  
 [座8-144]。歴史上の近代がすぎさったあとの「現代」が、ニヒリズムの苦  
 悩を深く抱えており、みずからもその時代の子であることを、丸山はすでに  
 自覚していた。」

ところが、これらの指摘は、笹倉本と中身も引用文献も同じである。しかも  
 丸山における「ニヒリズムの問題」は、それまでの丸山論が見落としてきた重要  
 論点として笹倉本が強調したことからであった。

たとえば、笹倉本435頁は、丸山の根本姿勢を、「絶望的な事態・ニヒル状況  
 見つめながら、それをあえてわが身に引き受けつつ克服に向かって立ち上がる」  
 ところにあったとする。そこに政治的自立の最後の起点があるからだ、と。

また笹倉本430頁は、丸山が現代世界の絶望的状况にヴェーバーと同様に対峙  
 した姿を、「合理化と官僚化というのは現代の逃れられない宿命であって、これ  
 に抵抗しても勝つ見込みはない、勝つ見込みのないその合理化と官僚化に抵抗す  
 るというのが現代の英雄なんだね」（丸山の言）という発言によって、丸山のユ  
 ニークなヴェーバー理解、それが丸山の自立の一起点である事実を示している。

そして笹倉本はその163-164頁で、この観点から丸山における「ニーチェ」や  
 「ドストエフスキー」の重要性を、

「右に見たような丸山の思考手続は、抽象化・一般化して言うと、ニヒリ  
 ズムの思想が政治主体の形成にとっていかに重要であるかを示すものであり、  
 同時にニヒリズムに向かうわれわれのあり方を問うものでもある。〔…〕以  
 上のように見てくると、われわれはニーチェ的な思想が政治的自立の手続に  
 にとって重要な意味を有していることを改めて認識する。丸山がニーチェにつ

いて肯定的に論じたことはない。しかし、このこととの関連で思い当るのはドストエフスキーである。先にも見たように、ニーチェとは異なるロシア的な方向ではあるが、同様にニヒルの極限から再出発していくドストエフスキーは、青年期以来丸山が深い関心を寄せる一人であった。」

と指摘する。

しかも笹倉本も、このこととの関連で、ベルジャーエフを同様に取り上げている。そこでは、苺部本と同じことを、苺部本と同じ引用箇所〔対談「文学と学問」座 8-144〕を使って、次のように論じている：

笹倉本27頁：「この発言〔対談「文学と学問」座 8-144〕からは、『ドストエフスキーの世界観』に丸山が深く感動したこと〔…〕が窺われる。そのさい『ドストエフスキーの世界観』や『偉大なる憤怒の書』の何が丸山を魅了したのかは、丸山が前者の書を他ならぬ南原に奨めたこと、また丸山がこの書との内容的な関連において後者の本を読み、前者以上に感動して再び南原に奨めたという事実から推測することができる。この点は後で扱う。」(『ドストエフスキーの世界観』の詳しい説明は、30頁以下にある。) (他に、笹倉本30頁以下、287頁以下、429頁以下参照。その他「事項索引」の「ニヒリズム」、「ニヒルから立ち上る」、「人名索引」の「ニーチェ」参照)。

これらの重なりは、何を意味するか。丸山のリベラリズムの根源にあるものを探る視点から、ニヒリズム、ニーチェ、ドストエフスキー、ベルジャーエフ等を——丸山が遺した膨大な作品に分け入りそのなかの小作品に短く出ている記述に目をとめつつ——めぐり出し相互に連関づけること、丸山においてはリベラリズムがニヒリズムと独自の、逆説的な関係構造にある事実は、丸山を読みさえすれば可能といったものではない。事実、丸山の内面にあったこうしたニヒリズム問題を全面展開した本や論文は、笹倉本前にはなかった；笹倉本後にも、苺部本以外に、自説のかたちで主題にしたものはない。

しかも笹倉本でそれが主題としてあることを、丸山論をする者が笹倉本を読んでいて見落とすようなものでもない。

## 5 「理性」による個人主義と「個性」による個人主義との相克をめぐって

これは、〈近代の精神〉がその内部で二つの方向性(啓蒙主義の〈人間の理念追求〉と、ロマン主義の〈実存尊重〉と)の相克を経験していた事実や、さらには「人間の尊厳」(〈あるべき人間〉像をモデルとする)と「個人の尊重」(〈各人の各人なりの自己実現、幸福追求〉を尊重する)との緊張した関係等を考える上で、また

丸山の間観ないし「自由」論の根底にある〈異質な要素間の緊張関係〉を理解する上で、重要な論点である。

荻部本は191頁以下で、丸山が「西欧的な個人主義」における二つの流れの対立を論じたことをテーマにしている：丸山は、「「西欧的な個人主義」が、実は深い困難にぶつかることを告白する」（192頁）；「西欧的な個人主義が、「理性」によるそれと「個」によるそれとに分裂したと丸山は見た、と。丸山のこの指摘を深めることが丸山研究にとって重要である、と荻部本は言う：

荻部本191-192頁：「論文「忠誠と反逆」（一九六〇年）のころから丸山は、理想の姿としての「主体」よりも、あるがままの個人としての「自我」に視線を定めて、議論を展開するようになってゆく [松沢・千葉二〇〇三]。そして、その自我は内部に亀裂を抱え、不安定に揺れ動いている。安東仁兵衛との対談「梅本克己の思い出」（一九七九年）で丸山は、みずからが立脚する「西欧的な個人主義」が、実は深い困難にぶつかることを告白するのである。」

荻部本は、この点に関して「梅本克己の思い出」から丸山の次の発言を引用する、

「伝統的個人主義をいわゆる原子的な個人主義として見れば、全ての人間に備わっている理性というようなものによってくくられてしまう。ですから、啓蒙の個人主義をつきつめていくと類的人間になるんですよ。そういう普遍的理性によってくくられない個、ギリギリの、世界に同じ人間は二人とないという個性の自由は、むしろ、啓蒙的個人主義に抵抗したロマン主義が依拠した「個」です。この西欧的な個人主義に内在する矛盾の問題ははく自身も解決がつかない […]

そして荻部本は、次のようにコメントを入れている：

荻部本192-193頁：「ほかの誰とも異なる、このありのままの「個」としての自我は、つきはなして眺めれば「エゴ」であり、「下意識」に渦巻く欲望のかたまりとして、マスメディアなど外部からの影響にさらされ、他の自我との癒着と離反をくりかえす。しかしそれでも、この自分が独自に一貫した信条をもつことができ、必ずしも欲望のままに流されないことは、疑いようがない。それでは「自分を自分たらしめている」ものは何なのか。誰もが「エゴを超えた何物か」である理性を備えていて、それが人格の統合を保つというのが「啓蒙的個人主義」の答であるが、そのような万人共通の特性が、ほかならぬこの自分を「自分たらしめている窮極のもの」と言えるのか。」

ところが、これらすべてが、笹倉本と内容が重なっているばかりでなく、議論

の仕方も、たとえば「梅本克己の思い出」(1979年)を典拠にし、その同じ箇所からの同様な引用によるものである点で、似ている。

すなわち笹倉本は、158頁以下で、「理性」による個人主義と「個性」による個人主義の相克を、次のように問題にした：

笹倉本158-159頁：「社会的関係にも他の人間にも解消できない、一人ひとりが自分だけの存在であるという自覚……、ここで各人は、一切の規範性や同質性をもたない——「我考える」といった理性的同質性や、人間性、人格、「純粋自我」等による同質性、さらには自然との直接的な物質代謝関係にあるといったかたちでの自然的同質性をすら捨象した——ギリギリの存在となる。丸山は、この「自分だけで存在する自分」について、一九七八年の対談「梅本克己の思い出」で、その位置づけを明確にしている。すなわちかれは、「全ての人間に備わっている理性」を前提にした「啓蒙の個人主義」が、そのことのゆえに「類的人間」につながるのに対し、これとは別に、「そういう普遍的理性によってくられない個、ギリギリの、世界に同じ人間は二人といないという個性の自由」に立つ、「ロマン主義が依拠した」個人主義があるとし、「この西欧的な個人主義に内在する矛盾の問題は僕自身も解決がつかない」と述べている。」

笹倉本は、この「世界に同じ人間は二人といない」の認識こそが、丸山の「個人の内的自立」のための重要な出発点であること、その点で、超越的な神と人間各人とを直接に向きあわせるプロテスタンティズムや、上述した(「4」)ニヒリズムがわれわれに自覚させる「精神的裸一貫」とも結びついていることを指摘し、丸山のリベラリズムの根幹事項として論じているのである。

ところで荻部本は上に「[松沢・千葉二〇〇三]」とあったように、このテーマに関し松沢弘陽・千葉真『ICU一般教育シリーズ35・政治学講義』(ICU教養学部刊、2003年)を挙げている(ここでも「玄人筋」に依拠したことを認めているのである)。ところが、この『政治学講義』は、入手がきわめて困難な本である(CiNii Booksで検索しても、入っているのは東大法学部図書室だけである)。荻部本は、そのような本をわざわざ挙げているのに、このテーマを最初にかつ詳しく展開し(丸山における二つの個人主義)の重要性を強調している、入手が容易な『丸山眞男の思想世界』をなぜ挙げなかったのか。しかも、これを読み、自分の本との大きな重なりを知っていたはずなのに、である。

## 6 「新らしき規範意識」に関する丸山の主張をめぐって

このテーマは、戦後世相(感覚・欲望の自由に傾斜する)に対する丸山の違和感

の根底にあるものを知るためにも、日本の民主化に対する丸山のユニークな課題設定を知るためにも、後述のように丸山思想史の視座転換（戦前の助手論文での徂徠・宣長評価から、戦後の諸作品におけるその批判への転換）を知るためにも、丸山が日本の超国家主義とドイツのファシズムとを対比する際の思想の根本を知るためにも、重要である。

荻部本はその144頁で、この点をテーマにし、次のように論じている。

荻部本144頁：「だが、丸山による、『超国家主義』あるいは『日本ファシズム』の精神構造の分析は、『倫理の内面化』（集3-25）を達成し、『主体的意識』をはぐくむためには、日本人がどのような内面の敵と闘わなくては行けないかを示したものであった。そうした問題意識から歴史に切りこんださいに見えてくる像を、丸山は描いたのである。倫理性への志向の強さは、『日本における自由意識の形成と特質』（一九四七年）や、『肉体文学から肉体政治まで』（一九四九年）といった、終戦直後の丸山の文章にいちじるしい。」  
荻部本はこの関連で、戦後の日本人には感覚・欲望面で自分達を解放することなく、自分達の中に新しい倫理性を確立することが重要課題だとする：

同頁「『民主主義革命の完遂』のためには、『単なる大衆の感覚的解放』ではなく、『新らしき規範意識をいかに大衆が獲得するか』が大事なのである。」

ところが、この点も笹倉本が同じことを同じ引用箇所を使って論じている。

笹倉本は139頁以下で、丸山の超国家主義論（論文「超国家主義の論理と心理」1946年）を分析し、主張の背景となる丸山の考えを探っている。そして丸山のこの論文が、〈普遍性〉と結びつくことによって精神的・内的に自立すること）を欠く日本人の問題性を指摘する点で、戦前の北畠親房論（「神皇正統記に現はれたる政治観」1942年）（笹倉本196頁以下参照）と、また戦後の論文「日本における自由意識の形成と特質」（1947年）や「肉体文学から肉体政治まで」（1949年）（両者はともに笹倉本184頁に出てくる）、佐久間象山論（「幕末における視座の変革」1965年）（203頁以下）などと、発想において連続しているとする。笹倉本は、それゆえ戦後の丸山の新たな課題意識が、感覚的解放ではなく倫理性の確立が重要である、との確認に定礎していたとする。その際、笹倉本が丸山のこの立場が確認される文献として挙げているもの、ないしそれらの取り扱い方は、荻部本と同一である。たとえば、笹倉本185-186頁は、荻部本と同様、次のように指摘している：

笹倉本185-186頁：「〈感性に立脚した『自立』でなく精神・理性に立脚した自立こそが、私生活への自閉といったかたちで、状況に埋没することのない社会的主体へと人間を高める〉という点については、たとえば丸山自身の

次のような言明が、興味深い。「外部的拘束としての規範に対して単に感覚的自由の立場にたてこもることはなんら人間精神を新らしき規範の樹立へと立向わせるものではない。新らしき規範意識に支えられてこそひとは私生活の平穏な享受から立ち出でて、新秩序形成のための苛烈なたたかひのなかに身を投ずることが出来る。」(「日本における自由意識の形成と特質」)

ここまでの一致が、偶然に起こるものだろうか。しかも、上に見たような議論をする丸山論者が、笹倉本を読んで、重なりに気付かないままだったということがありうるものだろうか。丸山の思想のこのような理解は、『丸山真男論ノート』(1988年)前には見られなかった。その後 common knowledge となったわけでもない。この事実は、荻部本自身が証言している。すなわち、荻部本146頁には、丸山が超国家主義批判に込めた上記メッセージは、「広く注目されるには至らなかつたとし、その原因は、丸山が自分の思想を露骨に出すことを避けた禁欲のため、「その日本社会批判の出発点にあるものを、読者に見えなくさせた」ところにあるとする。

## 7 心情の解放だけでは権力にからめとられる、との丸山の警告をめぐって

これは、上の「6」と内容上不可分に関わり、かつ丸山の基本スタンスが戦前と戦後で大きく異なること、とくに欲望に走る戦後日本の世情に対しかれがもった違和感に関わる重要事項としてある。

荻部本は、95頁から103頁にかけて、丸山の戦前、助手時代の論文(『日本政治思想史研究』(1952年)第1、2章)と戦後の丸山の思想との関連を扱う。そこにおいて荻部本は、〈丸山は、戦前、助手時代に出した、近世思想のとらえかたを、戦後になって自分で変更した〉とする。すなわち、荻部本によると、丸山は戦前では徂徠・宣長らによる〈心情の解放〉を高く評価したのだったが、戦後になると丸山はそれを、幕藩体制がもたらした病理と見るようになった；丸山は、戦後の日本の欲望第一主義を目の当たりにして、幕藩体制下の日本人についても、専制支配下で政治的に疎外された庶民は欲望・心情の発露だけを求めるようになったと見たからである、と。そして荻部本は、丸山がこの病理に対抗するべく下からの道徳秩序の形成による新しい市民的秩序の構築を説いた、とする：

荻部本101-102頁：「かんたんに整理すれば、助手論文は公私の領域の分離を構図として描き、全体を管制する政治権力のもとで、「私的」な活動がさまざまに展開するという「寛容」の体制を、「近代的なもの」と呼んだ。〔…〕「しかしそれは、「政治的なるもの」の担い手とその支配下に生きる個

人のありのままの欲望や心情の発露を許すというだけで、場合によっては統治者の恣意による専制とも両立してしまうだろう。丸山が福澤論の記述にもりこんだ見聞が伝えるように、戦時日本の強力な統制のもとでも、私欲からそれをかいくぐる、「免れて恥なき意識」が横行していたのである。[…]これに対して、個人の自由の確保と、政治権力に対する批判とを、倫理としてしっかり基礎づけるには、ありのままの自我の「私的」な内面と、権力が規制する「公的」空間との間に、たがいの自由と権利を維持すべく、「主体」どうしが結びあう道德秩序を、考えなくてはいけない。」（144頁も同じであることは、上の「6」参照。）

ところが、この指摘は既に「6」から窺われるように笹倉本の指摘とまったく重なっている。笹倉本も、丸山は戦前、助手時代の論文（『日本政治思想史研究』のとくに第2章）では進歩だとしていた「徂徠-宣長」による〈心情の解放〉を戦後においては（たとえば1947年の論文「日本における自由意識の形成と特質」等では）、〈幕藩体制下の政治的疎外現象；専制国家の下での私的・心情的自由への自閉性の現れ〉として消極的に評価するようになった；そして、この政治的疎外を克服する方向を、〈下からの規範形成運動〉に求めた、と指摘しているのである。笹倉本104-105頁には、次のようにある：

笹倉本104-105頁：「徂徠-宣長の線に進んでいった〈規範の外表面化〉は、人々が、そのことによって解放された個人的実感に固執して自閉することを帰結させることに留まってしまい、そこに拠点を築いて社会へ向かう意識を育てなかった。それは何よりも、第一に、規範の外表面化自体が、規範および国家と個人との二極分解を結果するものであるからである。そして第二に、その場合でも、もし個人に規範意識を新しく——個人の側から出発し旧き国家をも突破する倫理として——芽生えさせ成長させていく方向が定着しておれば、それをテコに、（新しく形成された）規範や（新しい）国家と個人との再結合が可能になるのだが、それができなかったからである。この第二点が達成されなかった原因の一つは、規範の外表面化論が、もっぱら近世国家の、上からの一方的な官僚制的整備の結果であったことにある。すなわち、旧い規範が新しい時代に合わず形骸化していることを人民が批判し変革しつつ新しい規範をつくり上げていくという〈下からの規範形成運動〉——それはたとえばヴェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で描いた、プロテスタントの社会変革の運動である——がなかったことにある。そしてもう一つの原因は、そのけっか官僚制支配が強化されていく中で、個人が政治から疎外され、（井原西鶴が描いたような）享楽と利益追求の場に「自由」を求める方向をとるにいたってしまったことにある。」（このテ

一マの展開部では、苅部本は丸山の別の文献をも前面に押し出しているが、しかし丸山の心情主義に対する上記警告が強く押し出されている部分は、上にあるように重なっている。）

上記『日本政治思想史研究』（1952年）における、第1章と第2章の関係付けも、この関連で重要である。正しい関連づけによって初めて、政治に対する丸山の姿勢の2側面を正しく把握できるからである。この点については苅部本は、第1章（下記では苅部は「助手論文」と呼ぶ）を日本における「政治的なるもの」の覚醒を析出した章ととらえ、これに対して第2章（苅部は「第二論文」と呼ぶ）を（政治の外面性とは異質の）内面の覚醒過程、それがもつ政治的意味を論じた章ととらえている：

苅部本101頁：「この第二論文の画期性は、助手論文での「政治」の固有性の指摘に加えて、そうした「政治的なるもの」がなりたつ以前に、どんな公的権力も侵してはならない道德秩序が、論理上、存在するはずだと説いた点にある。」（これが「政治的なるもの」の存立に先行する。）

ところがこの点も、笹倉本とで重なっている。笹倉本165頁は、これまでの丸山論では「政治の発見」が言われてきたが、それは『日本政治思想史研究』第1章の主題に限定されるものであって、同書第2章は徂徠学・国学による「非政治的人間の発見」の重要性を主題としている、とする。笹倉本は102頁以下でも次のように、『日本政治思想史研究』第2章を「内面的心情の世界の不可侵性」の覚醒がテーマとなっている、とする：

笹倉本103頁：「個人は、徂徠が打ち出した〈規範が人工物である〉との見方を採ることによって、〈規範や国家は個人を全面的に包摂することはできず、個人に対し外的なものに留まる〉として、それらを相対化することができる。個人は、このことをつうじて、外面化した規範からの、すなわちまた国家からの、「否定的独立」を得る。」

そして笹倉本は、『日本政治思想史研究』第1章が「民主主義」原理に、第2章が「自由主義」原理に関わるとする。

研究者なら、笹倉本でここまで重視されているテーマ、〈民主主義対自由主義〉に関連する箇所を読んでいて、自分が説こうとすることとの重なりに気付かないはずはないだろう。

上の丸山理解は、笹倉著『丸山真男論ノート』より前には見られなかったし、その出版後も common knowledge 化してはいない。現に間宮陽介は、『丸山真男手帖』39号（2006年9月）65頁において、「丸山の著作を系統的に読んだことのある人なら誰しも経験するところであろうが、何度読んでも […]『日本政治思想史研究』の第一論文と第二論文の区別もつかなくなってしまう」と書いている。



## 8 「自分と同じ人間は世界に二人といない」との丸山の主張の含意をめぐって

このテーマは、上述の「4」のテーマと関連している。それゆえこれも、些末な問題ではなく、丸山のリベラリズムの根幹に関わる。「自分と同じ人間は世界に二人といない」の自覚は、各人が精神的に自立する核を成す思想的要素の一つであるからである（この点は、笹倉本第2部第2章の主題である）。

苅部本は、171頁において、「自分と同じ人間は世界に二人といない」。この事実の自覚が「精神的な自立の最後の核」になる、という丸山の発言に注目する：

苅部本171頁：「丸山はのちに座談会で、「自分と同じ人間は世界に二人といない。簡単にいえばこの自覚、というより驚きの自覚が精神的な自立の最後の核じゃないかと思うんです」と述べている [座5-305]。相手の思いをすぐにわかったつもりになる、安易な同情の態度を捨て、その人を「他者」として理解しようとしながら、対話を続けてゆく。その過程で、ひるがえって自分自身についても、その「かけがえのなさ」を、驚きをもって自覚することになるだろう。」

相手と「安易な同情」をしあって関係をつくることを社会・政治の原理とするのではなく、各人の一個性を自覚しそれを互いに尊重しあうこと、それこそが自己尊重、自立の核となるという、丸山的リベラリストの一つの根底を成す政治メッセージである。

ところが、この点も同様に笹倉本が、「個人の内的自立」、自由主義のもっとも核になるものを語る、丸山の重要な言明として取り上げている。たとえば：

笹倉本158頁：「自立的な社会的主体であるためには個人はまず非社会的主体でなければならない、ということ、[…]「自分は世界に一人しかいないんだ、これは非常にふしぎなことだと思いませんか。自分と同じ人間は世界に二人といない——簡単にいえばこの自覚、というより驚きの自覚が精神的な自立の最後の核じゃないかと思うんです。」（丸山真男氏をかこんで 一二八—一二九頁）といったことがらである。」

同159頁：「各人は、究極的には社会的でないところか、共有するものすらもたないという認識である。シュティルナー的に言うと、これは、「人間性」に立脚した自由主義をも超える性格のものである。政治が人を量的にとらえようとするのとは正反対に向かうものとしての、ジンメルと言う一人的自我[…]、その不可還元性の自覚、そこに「最後の」拠点を置いて立つことこそが、あらゆる場において自分の尊厳性を確信しそれに自信をもつというかた

ちで、人間の内的独立性の原点を成すのである。」

笹倉本でも、同じことが同じ箇所からの引用を使って論じられているのである(「丸山真男氏をかこんで」での丸山の発言。そこにある「自分と同じ人間は世界に二人としない」(「自分は世界に一人しかいないんだ」)がそれぞれ苅部本・笹倉本で同様に引用されている)。

丸山のリベラリズムの根底にこのような〈各人の一個性の自覚〉があること、それがかれの助手論文以来の視座の転換に深く関わる問題であるという事実は、丸山研究において未だに common knowledge ではない。丸山の諸作品を読めば誰でもが気付くといったものではなく、丸山の作品の時間をかけた渉獵と、リベラリズムに関する思索とを要することがらである。

## 9 〈個人の自立〉と〈国家統合〉との丸山における同時追求をめぐって

これは、丸山による、ナショナリズム研究や近代の国民主義的自由主義研究、とくに丸山にとっての福澤諭吉の思想の重要性、を理解する上でも、また、戦後日本政治に対する丸山の課題提起を理解する上でも、重要なテーマである。

苅部本128頁以下は、「戦後における「民主主義」の論者、丸山の誕生」を語り、それが陸羯南論や福澤諭吉論に現れているとする。苅部は、丸山の、明治前半期の政治思想、そこにおける国民主義思想に関する研究が、戦後の丸山の民主主義思想に緊密に結びついている、と見るのである：

苅部本128-129頁：「戦後における「民主主義」の論者、丸山の誕生である。占領下にあつてその営みは、旧来の忠君愛国の国民道徳とは異なり、他面で占領政策への無批判な迎合もしりぞける、「健全」で「民主的」なナショナリズムを、新しく創りあける課題と重なっていた [集5-121]。論文「陸羯南——人と思想」(一九四七年)や「明治国家の思想」(一九四九年)では、福澤や羯南の思想に見られる、明治前半期のナショナリズムを再評価し、その再生を読者に呼びかけている。」

苅部本はこの関連で、福沢の「一身独立して一国独立する」の思想の丸山的位置付けに関して、84頁以下で次のように論じている：

苅部本86頁：「こうした病理現象に対して、丸山が福澤の思想の紹介を通じ、理想として掲げるのは、まず個人の一人一人が周囲の環境から精神を引き離して「独立」し、「自主的人格」を確立することである。そしてその上で、それぞれ「国家構成員としての主体的能動的地位」を「自覚」し、政治にかかわってゆくことで、「近代国家」の秩序としての自律がなされる [集

2-201~202]。やがて終戦直後には、これを「近代」思想の論理として、簡潔に定式化している。」

各個人の自立・自由こそがその能動的政治主体性を支える；各個人の自立・自由に支えられてこそ、民主主義が生きたものになる、という立場である。

ところが、この〈丸山が戦後には民主主義を主体的なものにしようとする課題意識から明治前期国民主義を評価したこと〉、および〈丸山の国民主義が、個人の自立の自由主義的要素と、政治への主体的能動性の要素とを緊張させていたこと〉についても、実は笹倉本が同じかたちで、かつ複数の同じ文献（丸山の論文「福沢に於ける秩序と人間」中の）の、それぞれ同じ箇所を使いつつ論じている。

たとえば笹倉本98頁以下では、「丸山は、明治前期国家思想の研究を、戦後の民主主義的政治課題に […] つないでいく」として、次の点が強調されている：

笹倉本98頁：「丸山は、明治前期国家思想の研究を、戦後の民主主義的政治課題にこのようにつないでいくのであった。こうした文脈において書かれた作品に、「福沢に於ける秩序と人間」（一九四三年）、「陸羯南——人と思想」（一九四七年）、「福沢諭吉」一一九五三年）等がある。なかでも、「福沢に於ける秩序と人間」、すなわち丸山二九歳の時の作品（『戦中と戦後の間』、『丸山眞男集』第二巻）は、本第二部の「はじめに」で見た学生論文の問題意識（個人と国家の相互内在的結合）を鮮明に継承したものとして、われわれの当面の考察にとって重要である。すなわち、ここでは、福沢研究において従来対立的に扱われてきた、福沢の「国家主義」の側面と「個人主義」の側面とが、実は福沢の内部で——国民主義の課題によって——不可分の関係にあったという点が解明される。国家が、個人に対して不動の前提（「一つの社会的環境」、「自然」）として君臨し、個人に無批判的な服従を強いていた古い関係が打破され、個々人が「国家構成員としての主体的能動的地位を自覚」すること、そのことによって、他方で、国家が「個人の内面的意識の裡にとり込」まれそこに強固な精神的地盤を固めること、こうした道によってこそ、主体的で愛国的な国民に支えられた強固な独立国家の建設が可能なのだと福沢は考えたのであった（『戦中と戦後の間』一四四頁）。」

福沢における〈ナショナリズムと個人の自由とのユニークな関係〉に関する丸山の認識を、笹倉は1979年の（自由主義と民主主義の関係を一つの柱にした）『近代ドイツの国家と法学』（226・227頁）以来扱い、丸山のこの福沢理解が、丸山理解にとっても福沢理解にとっても重要であることを『丸山眞男論ノート』等でも指摘してきた（そうした指摘は、それまでの丸山論にはなかった）。

丸山において、戦前には自由主義原理が、戦後には民主主義原理が前面に出たこと、戦後における民主主義原理の提唱は丸山の陸羯南論・福沢諭吉研究にも出

ていること、そこでの丸山においては〈個人の自立〉と〈国家統合〉との同時追求、〈自由主義と民主主義の結合〉が主要課題であったこと、の認識は、荊部本が指摘しているように、「世に流布する丸山のイメージ」には未だに欠けている（実際、最近でさえ、〈丸山＝国民国家論者〉論に見られるように、丸山の思考のこのダイナミズムはとらえられていない）。

## むすび

1. 荊部本が出している、政治思想学上の重要論点は、上で扱った9項目にほぼ尽きる（あとは伝記的エピソードである）。荊部本のこれら重要論点の数多くが、先行研究（笹倉本）のそれらと、内容的にも引用箇所等をめぐっても大きな重なりをもっているのだ。荊部本には「丸山眞男という希有な知性がのこしたことばの群れの中へわけいって、そのなかをさまよう途上で見つけた、珠玉や棒きれや落とし穴」（205頁）とあったが、笹倉本を既に読んでいた荊部が「さまよって独自に見つけた「珠玉」等々は、だとしたら何と何だったのか。

上で扱った九つの重要論点が、〈丸山を注意して読めば、誰でもが容易に至りうる認識〉であるのなら、これまでに数多くの丸山論書が出ているのだから、何冊かはそれら論点のいくつかを同様に扱っているはずである。ところが、そうしたものは、笹倉本と荊部本との2冊しかない。

2. ところで、本稿の読者は途中で疑問をもたれたことだろう：「なぜ、数ある丸山眞男論の中で、笹倉の本とだけこうも重なっているのか」と。筆者自身、この疑問に終始付きまといながら、本稿を書いてきた。しかしこの点については、都築の次の指摘を読めば、少しは納得がいく。都築は2000年に、笹倉著『丸山眞男論ノート』（1988年）について次のように書いている：

「この書物を詳しく紹介することは紙数の制約でできないが、ここでは、その後今日までの10年余りの間に、様々な論者によって指摘、展開されて来た丸山論の主要なポイントが、論点としてはことごとくすでにこの書物で挙げられていたことを記憶すれば足りる。」（都築勉・前掲「丸山眞男論の現在」27頁）

この指摘は——それが当たっておればの話だが——荊部本と笹倉本との上述した重なり背景事情を示してくれる。都築の指摘の6年後の荊部本（2006年出版）が、上にある「ことごとくすでにこの書物で挙げられていた」状況を相変わらず打破しえていなければ、重なりがいくつも出現するのは論理的帰結だということだ（もっともこれは、重なりが自覚なしに出現した場合に関わる。異なる著者間でのこ

れほど多くの重なりが無自覚に生じたとは考えにくい点が、別途問われるべきこととしてある)。

3. 最後に、次の諸点を考えておこう。一般的な話としてだが、

(1) ①自分が提示しているいくつかの主要論点(命題)が或る先行研究で指摘されていることを知っていたのに、読者にその事実を示さないばかりか、逆に〈自分は、これまでの類書にはなかった見方を独自に構築した〉と強調することには、問題はないか。

——これは、アイデアの無断借用に関わる問題である。そうしたことを、「不適切だが、違法でない…著作権法に違反しないから」として済ましてしまうか、インモラルを真摯に受け止めるかは、本人、出版社、関係諸機関、読書界それぞれの倫理度によるのである。

・〈書いた本は、新書である。新書は非学術書だから、その箇所について特定の先行研究を挙げなくともかまわない〉という意見は、どう考えるべきか。その主要メッセージの記述が本稿で見えてきた程に重なっている先行研究があれば、最低限それを示すのが、新書であろうとなかろうと、モラルだろう。とりわけ自著のオリジナリティーを強調している本の場合には、どこがオリジナルで、どこからが特定の先行研究に依ったかを明示しておかなければ、読者に誤解を与える。

・〈命題は2著間で似ているが、丸山に対する根本的なスタンスが違う〉、〈命題は似ているが、細部の脚色が違う〉との抗弁は成り立ちうるか。無断引用の場合には、無断引用箇所の同一性が決め手であり、「根本的なスタンス」や「細部」の違いは抗弁にならない。アイデアの重なりが問題になる場合も、骨核の重なりが重要で、「スタンス」、「脚色」に逃げられないだろう。

②或る先行研究が同様の論点を同様のかたちで論じていることを知っていたが、〈それらはすでに common knowledge になっている〉と判断して、その先行研究を挙げなかった場合はどうか。

——この場合は、倫理上の問題はないだろう(しかし、本件がこの②に該当しないことは、先に詳しく論じたところである)。

③先行研究を示すことをつい忘れてしまった、という場合はどうか。

——この場合は、倫理上の問題は軽いだろう。しかし、気付いた時点で補筆するのがモラルであろう。

(2) 自分が書いた主要メッセージのほとんどが或る先行研究にすでに出ているのに、そのことをまったく知らないで、〈自分が書いていることは自分の独創だ〉と信じつつ執筆し公刊した場合は、どうか。

——関連文献が多いテーマの場合、それらを渉猟しつくすことは、不可能であ

る。自分の議論と重なる議論をしている文献ですら——とくに外国の文献や日本語の文献でも通常目にしない紀要やパンフ等を——見落とすことはありうる。それに関連文献をほぼ渉猟したうえで執筆しようとするのが常に妥当とも言えない。研究上必要な迫力を削ぐ場合があるからだ。だがこの場合でも、自分が重視する見解を出している先行文献にあとで気付けば、その時点で可能な手当（たとえば本の公刊後に起こった場合には増刷の際に書き入れるなど）をするのが作法だ。

また、邦語文献が中心で文献数も多くない場合には、自説と重なっている主要文献を見逃すことに対しては、過失責任が問われる。

本件はこの（2）の場合にも該当しない。前述のように、苜部は笹倉本を前もって読んでいた。読んでおれば、自分が自著で重要視しようとしている諸命題が先行文献で前面に押し出されているときには、それらの一つや二つにまず気づき、そのことで気になって再読して重なりをさらに自覚していくというのが、研究者なら通常であろう。

本稿で見てきたほどの数の主題を、異なる人物が互いに独立に（偶然に）同様に「発見」し同じ関連資料を使いかつ同じ文脈を構成しつつ提示するということはまず起こりえない、という前述の経験則も、上の点との関連において問題となる。